

講

演

# 先づ自己を知れ——日本文明研究機 關の整備を促す

文學博士 加藤 玄智

余や夙に思を我國固有思想の本源に潜め、本邦文明の由來を研鑽することを以て畢生の事業となし、先づ自家専門の學たる宗教學の方面より、日本宗教史の研究に従事すること、茲に年あり、先づ本邦思想の唯一源泉たる神道を科學的に正確なる方法を以て闡明するの必要を感じ、その研究の一部は不完全乍ら之を東京帝國大學の拙講に於て開陳し又其研究結果の國民教育等の方面に關するものは各種の通俗講演及著書に於てその一部を公にし、以て江湖の是正を仰げり、是れ内に向ひては忠君愛國の精神を涵養するに資せしめ外に向ひては近時我國文明の淵源大本の研究に着眼し來れる外人をして、我國の眞面目を遺憾なく了解せしめんとする微志に外ならず、蓋し彼れ外人が日本に對する完全なる了解は應て又其眞摯なる同情となり延きて彼我國交上にも多大なる和親と圓滿なる友誼とを贏ち得可く、從ひてそ

先づ自己を知れ

の結果の相及ぶ所、世界の平和と人類の福祉との上に、幾多の貢獻となる可きを確信せるを以てなり。思ふに近時外人の日本研究は日一日その歩を進め來るものあり、而て顧みて日本研究の如何にも幼稚なる我學界の現状に想を回らすときは、覺えず冷汗の背後を濕さざるを得ざるものあり、是れ余が自ら揣らす先づ日本文明の研究てふ大業を創むるに至りたる所以なり、蓋し最も能く自己を知るものは又畢竟自己に外ならざるを以て、日本人が日本を理解し日本に關する研究資料を有することの豊富なる、彼れ外人に比して幾倍の優位に在るは更に喋々を要せざる所、他國の學問は姑く置き、日本研究は遂に日本人自ら率先して、事に之に従はざる可らず、是れ實に日本人の權利にして又その義務なり、蓋しその言語思想人情風俗を熟知すと謂はんよりも、寧ろその言語思想人情風俗そのものを以てその自己の身心を形ち作れる日本人にして、始めて日本文明の實相に親炙し得可ければなり、此點に於て日本人が日本研究に従事するは真にその天職にして又最適任者なりと謂はざる可らず、唯動もすれば輒ち我日本人の彼れ外人に一籌を輸すの已むを得ざるものあるは實にその研究法の不完と、日に進み月に新なる幾多補助學科の最新知識の多少と、その研究機關の全不全とに由らずんば非ず、今假りに神道研究の一例を取りて之を考ふるも、從來我國に存する古今の神道研究が、遂に日新の學界より葬り去られ、唯全く過去の敗殘物視せられつゝあるは、眞個に此に因由するものと謂はざる可からず、我國固有の大道國民思想の淵源たる神道にして、世の識者より冷遇せられ了ること、是くの如し、豈に慨す可きの至りならず

や、然れども考一考するに、是れ決して神道そのもの、罪に非ずして、神道を取り扱ふ者の、徒に頑迷固陋自ら好みて世界の大勢に遠かり、歐米學界の現狀に精通せず、日新の學科利用に巧みならざるの致す所ならずんば非ず、是れ新しき設備と科學的に正確なる研究法とに由れる神道の新研究を要する所以にして、一は之に由りて漸く本邦固有思想に遠かりて輕佻浮薄に流れ去らんとする現代青年病弊の狂瀾を既倒に回へし、他は之を以て彼れ外人をして我國民の殊性美風をその根柢より會得せしむるに資するを得ば、豈に又本邦學者の素懷、我學術界の一大幸慶に非ずとせんや、斯くして始めて上に萬世一系の皇室を奉戴し、下に忠孝一本の精神磅礴しつゝある我國民の真相は、遺憾なく宇内各邦に了解せられ、延きて我國民の一大誇りとせる大和魂武士道の本性真相も亦能く世界に理解せらるゝに至るべきなり。

今又更に眼光を一轉して姑く彼の佛教を見んか、佛教が日東の文明に影響せしものゝ多き、誰れか又之を拒まん、文學にまれ美術にまれ工藝にまれ言語にまれ日常風俗の些事に至る迄、佛教の影響を蒙らざるもの果して幾何かある、こは又實に余の喋々を要せざる所なり、而も今余の専門學たる宗教學の方面より之を觀察するに、佛教が日本の宗教思想進歩の上に貢獻せし功績は決して没す可からざるものあり、佛教一たび我國に入りてより、從來外面的なりし宗教思想はより多く内面的に有形的より無形的に、自然的より精神的に發達進歩し來りたるは、一部儒教に負ふ所ありしは勿論なりと雖も、その大部分は之を佛教の方に歸せざる可からず、こは眞個に史上掩ふ可からざる事實なり、若し夫れこの方面より進

みて、日本佛教が我國の文明に貢獻せし過去の功績を認むることを得ば、そは又延きて日本文明の將來に及ばす可き佛教の前途を豫想し、佛教傳導上の設計に補益する所必ずしも鮮少なからざる可く、爲政者又之を參考して以て其施政方針の一助となすを得可きなり、斯く日本人固有の思想とも謂ふ可き迄に我國民思想に同化したる佛教が、我國の政治道德と相待ちて、社會人心を將來に指導し行くを得ば、豈に又國家人民の一大幸福と謂はざる可けんや、感情の一方にのみ馳せたる從來の排佛毀釋家は、一も二もなく佛教が我國害をのみ爲せるが如く云囉し、も、是れ楯の一面のみ見てその他面を見ざるの致す所、思ふに事物に一利一害の伴ふは又實に數の免れざる所にして、佛教如何に良宗教なりと雖も、亦その弊害の之に伴ふものあるや必ずしも否認し得可からず、而も之れが爲めに佛教が從來我國の世道人心に貢獻せしことの多大なる事實を全然無視す可きに非ず、否な宗教學の新しき研究結果に由れば日本在來の宗教を發達せしめて之を淨化し醇化するに與りて力ありし佛教の莫大なる功績は、到底之を没却す可からざる眞個に上述の如し、然るに悲き哉從來佛教と日本在來の宗教思想との交渉關係も、科學的に正確なる研究法と、宗教學上斬新なる著眼とを以て闡明したる者殆ど是れ無きが爲めに、佛教は單に陳腐なる排佛毀釋說に由りて破砕し了はられ、此に最後の致命傷を負ひて又起つ能はざるもの、如く誤解せる者無きに非ず、否な佛教家自身すら尙かく諦らめ居るが如き奇觀無き能はず、今宗教學上の新研究に由りて佛教の新方面を開拓し、以て佛教に對する從來の斯る偏見を一掃し、その眞價を發揮するを得ば、獨り佛

教其もの、利益たるのみならず、又實に邦家の至幸なりと謂はざる可からざるなり。又更に眼を轉じて之を基督教に見んか、輒近歐米の基督教がその宣教師を海外各地に派遣せんとするや、先づ該派遣地の宗教に關する一通りの知識、一應の概念は、之を各地に關する専門の宗教學者より習得せしめ、以て彼等布教の準備に供するは、目下歐米諸國に行はる、斯教界最新の傾向なり、是れ實に布教傳導上、彼等に取りて、最も策の得たるもの、如何となれば宗教の宣教も、廣き意味に於ける教育にして、教育には被教育者精神上の豫備を必要とし、我より與へんとするに當り、先づ彼れが精神上的の素質を熟知し置く必要あるは辯を要せざればなり、若し夫れ我國の基督教徒にして、我國固有思想の如何を知り、神儒佛三教等我國在來の教學に關して、その知識の大要にだに通曉し居らば、所謂教育宗教の衝突の如きは、事實あり得可からざる事となり、基督教の宣傳上にも多大の便益を得るに至る可し、是れ獨り基督教徒に取りて利益なるに止らず抑又我國家の利益なり、思ふに我が帝國の同一領土内に在りて、彼我互に相知り合へる一切の宗教は、又互に能く自己の本分を守りて、他の信仰を尊重し、濫に他を擠排せざるに至るや、燎々乎として火を視るより明かなり、果して然らば本邦宗教界の平和は、此に全く確保せられ、從ひてその結果彼の泰西に見るが如き、異宗教間に於ける反目嫉視は、全然我國内にその跡を絶つに至る可し、是れ我が國家人民の一大慶福に非ずして何ぞ、彼の歐と云はず米と云はず、將又日東の一帝國と云はず、その解決に苦みつゝある彼の勞働問題の如き社會問題の如き、如何に之を解決す可きか、尙

又之を外にして我國固有の精神たる武士道を將來如何に維持し助長し且つ發達せしめ行く可きか、上に萬世一系の皇室を奉戴し忠孝一本の觀念をその精神とせる國民道德の根柢を、如何にして培養す可きか、一言以て之を掩へば、教育勅語戊申詔書の大御心を奉戴して、如何に之を實行し、着々その結果を收むるに至る可きか、個人對國家問題、教育宗教關係問題等、此等諸問題の解決が吾人に肉薄しつゝあるものに至りても、その根本的解決は我國に在りては、又自ら我國民性の完全なる了解と、我國固有思想の特色とを眞に能く理解し得て、始て確乎たる最後の斷案を下し得べきものなり、是れ余が先づ日本思想の特色を科學的に研究して、其真相を闡明することの必要を近來特に痛切に感じ來れる一因由なりとす。

因に歐米諸國に在りては、某々講演と稱し、宗教學上の専門家の有益なる講演の行はるゝあり、その結果は後ち之を一冊の書に於て公にせられ來れり、是れ歐米に於ても、十九世紀以來基督教以外の宗教に對し、一般に同情ある理解を要求する傾向あり、その結果純粹に科學的研究の精神を以て、宗教の「ギツフオード」講演「ヒツバート」講演なるもの先づ英國に相踵ぎて起り、這種講演は後ち米國に迄波及せり、「ギツフオード」講演は、法律家「ギツフオード」卿が、その遺産の一部分を割きて、斯道研究者に提供し、以てその講演を開講せしめて、世道人心に補益する所あらんことを期し、「ヒツバート」講演は富豪「ヒツバート」氏の同一目的を以て、その資財を其の講演に好意的に寄附せしもの、此兩講演は、

何れも宗教に縁遠き人々の發起に係るを見れば、如何に泰西人士が、その諸有階級を通じて、一般に世道人心の誘掖指導に、居常注意を怠らざるものあるかを想見し得可きなり、その他某々講演と名稱を附して世に現はれたる同性質の講演の、現今歐米各國に行はるゝもの、實に枚擧に遑あらざるを見る、嗚呼又盛ならずや、若し夫れ本會研究部の事業にして、着々その實蹟を擧げ、その結果を、或は内外文の紀要に或は講演に於て世に公にし、以て之を國民思想の誘掖指導上と世道人心の向上と内外人彼我の理會上とに多少とも資するものあるを得ば、本會の存立亦多少の意味あるものとなることは余の疑はざる所なり。

我等身を以て學問の研究に従はんとする者、如上内外彼此の學界の趨勢に鑑み萬感交至るものあり、是れ豈に決然奮起先づ身を以て自ら信する所に向ひて勇往邁進し以て我國家と學術との爲めに犬馬の勞を致すべき時に非ずや、是れ菲才余の如き者も尙ほ 明治聖帝の宏徳を大正の將來に記念し奉るに、萬世不朽の眞理研究を以て任とせる學會、殊に日本文明研究を以て目的とせる本學會の成立を贊襄し、本會が有終の美を濟さんことを多數の會員諸彦と共に希求して止まざる所以なりとす。

先づ自己を知れ

沙門釋子、三界旅人、離家離鄉、無親

無族、……雖有避世出塵之操、不忘

護國利人之行（施暉、元亨釋書、二三）